

## コンクリート工学年次大会 2006（新潟）の概況

実行委員会委員長 林 静 雄

新潟大会は、「萬代なれ！コンクリートのときめき」をキャッチコピーとして開催された。より良いコンクリートへの試み、診断や補修補強の技術、最新コンクリート技術に心ときめかせて欲しいとの希望を込めた大会である。新潟県は、JCI大会の関東支部の開催地として、東京都、千葉県、神奈川県、茨城県に引続いて5県目となる。

新潟県は、「平成16年7月新潟・福島豪雨」「2004年新潟中越地震」「平成18年豪雪」と大きな災害を受けた。これらの災害からの復旧と復興の現状を見ていただく見学会、会場における「2004年新潟中越地震」や「1964年新潟地震」のパネル展示、「2004年新潟中越地震」の被災地である長岡市や小千谷市の小学生によるコンクリート製作展を企画した。以下各行事の概況を紹介する。

「開会式」では、実行委員長による開会の挨拶、友澤史紀会長の挨拶に引き続き、坂田憲次副会長によるJCIの2005年度の活動報告があった。

「第28回コンクリート工学講演会」は、3日間、9会場で開催され、633編の論文と報告が発表された。関東大会としては、過去最多の講演数である。

開会式に引き続き展示ホールにおいて、「コンクリートテクノプラザ2006、ドキドキわくわくコンクリートテクノロジー」のオープニングセレモニーが宇治公隆部会長を中心に行われた。テクノプラザには66社76小間の参加があり、最先端の技術が展示された。出展会社による技術紹介セッションも並行して開催され、40社からの最新技術の紹介と1364名の参加があった。

同じ展示ホールでは、同時に「2004年新潟中越地震」や「1964年新潟地震」の写真パネルによる特別展示も行われ、テクノプラザ見学者の注目を集めた。

「リサーチプラザ」は展示ホールにおいて、コンクリート工学協会賞14件と研究委員会報告10件のパネルが展示された。初日の午後には、加藤大介部会長の挨拶に引き続き、担当者を囲んだパネルディスカッションが熱心に行われた。

「生セミナー」は、初日の午後マリンホールにおいて、「よいコンクリートのための一步一步」のテーマで、455名の参加者を集めて開催され3時間半にわたる活発な討議が行われた。

「見学会」は、「平成16年7月新潟・福島豪雨」と「2004年新潟中越地震」の災害復旧現場見学の3コースが用意された。あいにくの大雨で実施が危ぶまれたが、無事に実施することができ、ほぼ定員いっぱいの参加者があった。

大会受付前では、「小学生が作るコンクリート in 新潟」の展示が行われた。関東支部若手会による企画であり、1998年の関東大会での実施に続いて第2回目となる。小学生によるほほえましい作品にみな心を和ませ、気に入った作品への投票総数は747票にもものぼった。2日目には、参加した小学校の中から社会見学として訪れていただけた学校もあり、テクノプラザも見学をしていただいた。思いがけない小学生の登場に展示担当者は驚くと同時に小学生の質問への回答に苦労したようであった。

「特別講演会」は、2日目の午後、マリンホールにおいて開催され、横浜国立大学教授吉田鋼市氏による「文化財としての鉄筋コンクリート造建造物」と(財)環日本海経済研究所理事長吉田進氏による「北東アジア諸国との経済交流」の講演が行われた。直前に講師の変更を余儀なくされた経緯があったにもかかわらず、290名の参加が得られた。

特別講演会終了後、ホテル日航新潟において開催された懇親会には 300 名の参加者があり、「万代太鼓」のアトラクションが行われるなど、なごやかな雰囲気の中が進められ、大塚浩司次期大会実行委員長から仙台大会の準備状況の報告がなされた。

「閉会式」では、実行委員長の謝辞のあと、白井伸明査読委員会委員長より発表論文の概況と課題についての説明があった。さらに加藤大介部会長から 69 名の年次論文奨励賞の発表が行われ、実行委員長から受賞者へ賞状と記念品（村上堆朱のぐいのみ）が授与された。小学生が作るコンクリートの表彰は投票結果を整理のうえ後日送付することとなっている。

最後に、友澤史紀会長より、大塚浩司次期大会実行委員長に委嘱状が手渡され、大塚浩司次期大会実行委員長より、挨拶と仙台大会への招待がなされた。

2005 年 1 月に実行委員会委員の全体像が構成され、年次大会 2005(名古屋)では是非キャッチコピーを紹介したいと皆で知恵を絞ってから、あつという間に開会を迎えることとなった。この長い 3 日間を無事に終えることができ安心して安心するとともに、実行委員の方々の献身的なご尽力に感謝している。

会場を借り切らなくてはならないために、大会始まって以来初めて火曜日からの開催となったが、論文投稿数は当初 800 編を超えて過去最多となり、講演会場が不足するのではと、うれしい心配から始まった。新潟という開催地設定がこのような強い関心を引いたものと大会成功を確信することができた。

生コンセミナーにも多くの方が参加した。コンクリート構造物の信頼性の向上への関心が、発注者だけでなく、製造者、設計者、施工者にも高まっていることも実感できた大会だった。小学生が大会会場に来場したのも初めてのことであり、次世代の子供たちに何らかのメッセージが残ったことを期待したい。

大会終了直後に開いた実行委員による反省会では、次期実行委員会から大塚浩司実行委員長はじめ多くの大会実行委員にもご出席を頂き、意見の交換を行うことができた。我々のできたことできなかったことを、次期大会の参考にしていただければ、こんなうれしいことはない。

本大会の企画運営に奔走していただいた、丸山久一副実行委員長、信田佳延全体幹事、各部会長をはじめ約 90 名の実行委員の皆様と本部事務局の皆様、大会へのご助言とご支援を賜った、友澤史紀会長はじめ役員の方々および小谷俊介大会委員会委員長をはじめ大会委員会委員の皆様、テクノプラザに出展各社の皆様、小学生が作るコンクリートに賛同ご協力いただいた教育委員会と校長先生をはじめとする先生方、小学生の皆様など本大会にご協力をいただいた全ての皆様に厚くお礼申し上げます。

また、本大会の開催にあたって、新潟県と新潟市からも多大な協力が得られた。関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。